# 西照

西照寺寺報「さいしょう」
第 17 号
2007 年 1 月 5 日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40

# 御正忌報恩講勤修

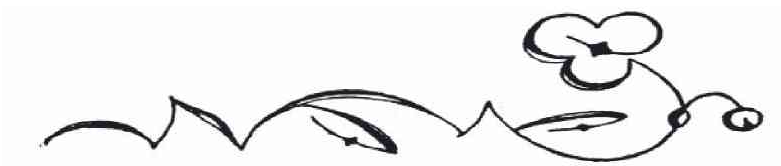
左記のとおり御正忌をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

一月十五日　午後二時(御逮夜)～
午後七時(御初夜)～
十六日　午前九時半（満日中）～

布教使　杉谷淳志師（南砺市城端町 瑞泉寺）

西谷山　西照寺



# ローソクと花とお香

浄土真宗では、仏壇にお参りするときも、お墓にお参りするときもローソクと花とお香（線香）は欠かせないものになっています。それでは、これらにはどのような意味と願いが込められているのでしょうか。

このことを改めて明らかにしてくださった方に花山信勝という和上さんがおられました。この和上は、戦後東京の巣鴨の刑務所に収容された東條英機さんなどのＡ・Ｂ・Ｃ級戦犯の教誨をおこなった方です。

当時戦犯が収容されていた東京巣鴨の刑務所には、キリスト教の礼拝場が設けられ、専任の牧師もいました。しかし、戦犯の収容者は９０％以上が仏教徒です。これはやはり、仏教のお坊さんが必要だということで、当時東大の教授であり、本願寺派（西本願寺）の僧侶であった花山和上に白羽の矢が立ったわけです。

花山和上が巣鴨刑務所へいってみると、仏壇がありません。しらべてみると以前はここに仏壇があったのですが、それを豊多摩の東京拘置所に移転してあることが分かりました。

「あなたは、あなたの本尊をもってきてよろしい」と、牧師から言われ、その移してあった仏壇と仏像を持ってきて、刑務所の中に仏間を設けました。

そうしてこれから、この仏間で戦犯の方々とお経を上げ、み教えを語り合うのですが、和上はどうしても、ローソクと花とお香（線香）が欲しいと思われた。

その辺の心境を「平和の発見」という著書に

戦犯者の「信仰」の友となるにあたって、何とかして、「仏間」に出られる時だけでも、目と、耳と、鼻の三感覚を満たしてあげたいものだと、痛切に考えた。どうしても花と、ローソクと、そして香りのよい線香は、ぜひ欲しかった。

活きた社会から全く隔絶され、冷たく凍っているこの人達の心へ、生き生きとしたもの、動くもの、明るいものを、投げ込みたいと念じたのである。

花と、ローソクと、線香は、どうしても欲しかった。しかし、当時焼跡の東京では、花の一束は、五十円出しても、なかなか入手が困難であった。人々は、食物におわれて、花をみる余裕など、まだ全然とり戻していなかった。

と述懐されています。

どうしても欲しかった。

そこでわれわれの手では入らないが、米軍なら、何とかなるのではないかと、チャプレンのスコット氏に頼みます。

一旦は、「ＯＫ」を出してくれましたが、手続きをとってみるとやはり困難であったようです。

「ドクター花山、花はどうしても必要なのか。キリスト教では、なくても、式をすますことができるのだが」

再度、どうしても必要なのかと聞かれます。

「どうしても必要なのだ。これは、宗教的な立場から必要なので、テーブルにおく花として必要なのとは、全く意味がちがうのです」

と和上はこたえます。

「そうか、それなら、いったい何故宗教的に必要なのか、理由を説明してくれんか」

そう言われて、和上は思いつくままに、つぎのようにこたえられた。

「ローソクは、いわばライト、人生の光だ。これは、われわれの方からいえば、仏さまの智慧を象徴することになるのだ」

「そうか判った。では花はどうか」

「それはマースイ、慈悲をあらわすものだ、ゴッドス・ラブ、神の愛を象徴する」

「うん、判った。では、線香は」

「それは、人間の罪を洗い清めるものなので、清浄を象徴する」

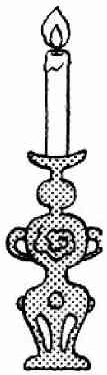
「それならよく判った。では何とかして花を世話してあげよう」

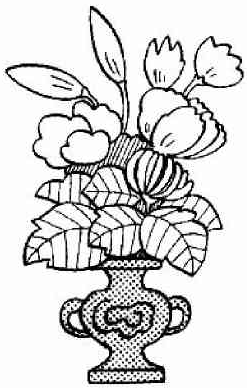
ということで、手配をしてもらって、そして、ローソクと花と線香を供えて、仏壇を荘厳して教誨をされたそうです。

仏さまのお徳を二つに分けると智慧と慈悲になります。

ローソクの炎は、闇を照らす光であり、心に暖かさと勇気を与えてくれるから、仏さまの智慧に象徴されるのでしょう。

花は、心を癒し、優しい気持ちを呼び起こしてくれるから、仏さまの慈悲に象徴されるのでしょう。





そして、仏さまの智慧と慈悲のはたらきが私に至り届いた姿を、お香によってあらわしているように思います。お香は、人間の罪を洗い清め、清浄をあらわすものとされています。

つまり、この三つをもって、仏さまの智慧・慈悲円満のはたらきが、この私に至り届いている姿を、私たちの感覚に分かるように、より具体的に表現したものかと思います。

仏さまを安置して、いろいろ飾ったり、お供えすることをお荘厳するといいますが、私たちの仏壇の荘厳は、仏さまのお国である浄土の荘厳を象って（真似て）おこなっているものです。

浄土の荘厳一つ一つには、如来の功徳がそなえられています。

ですから、ローソクと花とお香で荘厳する私たちは、ただ単にものを飾るということだけではなくて、より身近な私たちの感覚に添って、導いてくださるための如来さま功徳が供わった、具体的な働きと受け取ることが大切なように思います。

合掌

（文責　住職）

# 真宗の行事　　＜花まつり＞

４月８日のお釈迦さまの誕生日をお祝いする仏事を「灌仏会」「仏生会」「降誕会」などといいますが、一般的には、「花まつり」と言われ、広く仏教寺院で営まれています。

故事では、お誕生の時、草花は咲き乱れ、空から甘露の（あまい）雨が降ってきて、お祝いしたといわれています。そして、生まれてすぐに七歩あゆんで、右手を上に、左手を下に指さして「天上天下唯我独尊」（『大唐西域記』）と言われたと伝えられています。

これにちなんで、草花でかざった花御堂を作り、その中に釈尊の誕生の姿を象った「誕生仏」を安置し、甘茶をひしゃくでそそぎかけてお祝いするわけです。「灌仏会」という名称も、「灌」は「そそぐ」と読みますが、お誕生の時にあらゆるものがお祝いし、甘露の雨が降ってきたという故事に由来しています。また、甘茶で満たされた灌仏桶に誕生仏を安置し、甘茶をかけるということは、産湯につれるという意味もあるようです。

さて、生まれたばかりの赤ちゃんがすぐに歩いて、そんなことを言えるはずもなく、奇異な話です。しかし、これは嘘とか本当とかの問題ではなくて、仏教の全体を釈尊の誕生の故事に託して伝えようとしてきた後世の仏教徒の思いを汲み取っていくべきものであると思います。

なせ「七歩」かについては、迷いの世界である六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）を超えたということをあらわしていると解釈されています。

「天上天下唯我独尊」とは、あらゆる世界の中で、我ただ一人尊いものであるという意味かと思います。釈尊の尊さをそのように表現したとも受け取れますが、これは、「人は皆それぞれにかけがえのない尊い存在である、すべての人が独尊である」と解釈されるようになってきました。

この世界では、比べ合い、役に立つとか立たんとか、良し悪しで優劣をつけ、「いのち」をさげすみ、殺し合う現実があります。その世界に釈尊は生まれ出て、迷い（六道）を超えた仏の精神にたって、一人ひとりの尊厳を回復し、認め合い支え励ましあっていくことの大切さを私たちに知らせてくださったように思います。

花まつりには、甘茶をかけながら、もう一度お釈迦さまのおこころを聞いていきたいものです。